

へる。本圖、右下隅に方形重廓陽文「亮仙」の一顆を鈴す。蠹損著しく、而も他に比照すべき印影もないが結體は略々畫史所掲のそれと同系のものゝ如くで

内外彙報

傳教大師奉讀展覽會 來春延曆寺に於て比叡山開創千百五十年記念大法要の嚴修せらるゝに先つて、是れに因んで大阪市美術館に於て十一月一日より同月三十日まで一ヶ月間上記の展覧が催された。延曆寺を初め、山門派諸寺院所藏の繪畫、彫刻、文書類を蒐集したもので目錄に依ると繪畫五十一點、彫刻五點、文書二十三點、工藝品八點等が錄されて居る。會期中に多少の陳列替があつたと共に、目錄に收録されない番外出陳の數點があつたから、筆者の品鑑し得たものには多少の出入があるが、此の種の展覧として當然な多數の國寶類を一堂に陳列したことは最も我々觀者を喜ばせた。全出陳作品中特に珍しく見たものは、在來殆んど展覧されたことの無かつた太山寺の佛畫類、たとへば南北朝の頃の作ながらも、年代の降つた佛畫中では有數の名品とも云ふべき不動明王二童子像の如き、また稚拙の畫品に却つて一種の興味を思はせる法華曼茶羅の如きと共に、寺に元信と傳稱する山水圖六曲屏一雙等であつた。また延曆寺藏品中の『慧可』『道信』二顆の印記を見る山王祭圖六曲屏一雙は、元祿を僅に上るばかりで、畫品また高からぬものながら珍蹟の一種として興味饒かに、また極めて繊細な線を自由に驅使した泥描見返繪を有する鎌倉期の法華經等も注意すべき作品であらう。彫刻類中には平安初期と鑑せられる四天王寺の阿彌陀三尊像、其來迎らしい像容に近時學界の注意を喚んだそれ、及び既に定評ありて著聞するものながらも板彫念持佛中の優品としての横藏寺藏法華曼茶羅等があつて、一乗寺の高僧像、來迎寺の十二天、十界、十六羅漢など他の國寶の名品と共に、觀者を刮目させるに足るものが多かつた。唯此の展覧に就いて筆者の解

ある。(渡邊)

し難かつたことは繪畫作品の年代推定が概して古く、我々の管見に比して著しい差があるものを見たことであつた。(田中)

大倉集古館創立二十週年記念展覽會 過ぐる昭和五年、男爵大倉喜七郎氏は、現代日本畫を海外に紹介し、併せて、日伊兩國の親善を期して、八十餘名の現代日本畫家に作品を求め、百二十餘點を伊太利亞に送り、羅馬ヴィーア・ナチヨナレに於て展覧し、其所期の効果を收め、大いに兩國文化に貢獻するところがあつた。而して、今回、大倉集古館に於ては、其創立二十週年を記念して、十一月三日より十二月五日迄、上記の名目のもとに、之等の作品に數十點を加へて陳列し(平福百穂の「荒磯」、竹内栖鳳の「夏冬水墨山水」等の如く羅馬展出品作中、今回、出品のなかつたものもある)、一般に公開展覧した。會場の都合によつて四回に互つて陳列替が行はれたが、各美術團體を綜合し、大家のみならず、新進をも加へたる昭和初頭の日本畫壇を通覧し得たことは興味あることであつた。而して、今、全作品を通覧して、必ずしも佳作のみとは云ひ難く、又各畫家に就て見る時、必ずしも其本領を全體的に發揮し得なかつたものもあるが、然し、相當に秀作が多かつた。竹内栖鳳の「蹴合」「城外風景」、横山大觀の「夜櫻」「瀟湘八景」、川合玉堂の「柳蔭閑話」、前田青邨の「洞窟の頼朝」、小林古徑の「木兎」等は、錄記すべき作品であつた。(隈元)

圓山應舉展覽會 十一月十日より同月廿五日まで、恩賜京都博物館に於て上記の展覧が催された。傳山跡鶴嶺筆應舉肖像、眞仁法親王御筆應舉墓誌、遺印二十三顆及び肉池、印譜、潤筆料領收書、繪入消息、版本人物圖法等の外、遺